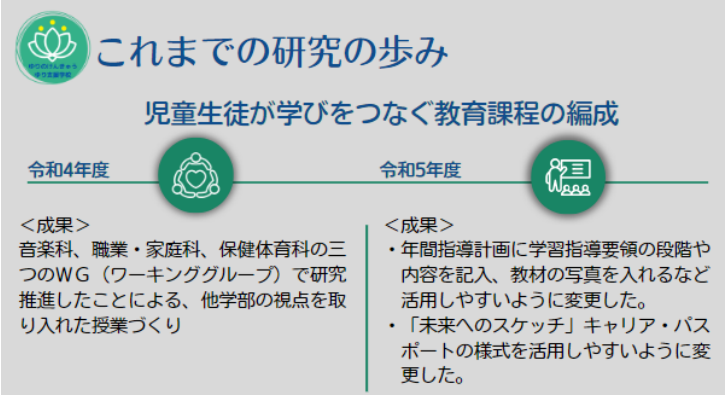
研究主題

学びたい気持ちを高め、夢中で取り組む姿を目指した授業づくり

～キャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通して～（1年次／2年計画）

１　研究主題設定の理由

（１）これまでの研究の歩み



本校では、令和４年度から研究主題を「児童生徒が学びをつなぐ教育課程の編成」として研究を進めてきた。「児童生徒が学びをつなぐ」とは、児童生徒が学習内容に見通しをもったり、学んだことを活用し、次の学習へ生かしたりしている状態を指している。児童生徒が学びをつなぐために、教師は学びをつなげるための具体的な言葉掛けや学んだことを家庭と連携したり、教室へ掲示したりするなど支援の工夫を行ってきた。さらに令和５年度は学部の授業を中心とし、児童生徒が学びをつなぐために年間指導計画やキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の様式を活用しやすいように変更しながら研究を推進した。研究を実践する中で教師は児童生徒が目標を設定したり、適切に評価を繰り返したりすることの大切さ、学校、家庭、寄宿舎と連携をして児童生徒のできたことや成長したことを認めるとともに、児童生徒の自己理解を育んでいく必要性などについて深めることができた。

また、本校では令和２年度からキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」を中・高等部が作成し、令和３年度から小学部が作成し始めた。将来の夢を記入し、学期ごとに振り返りを行ったが、様々な実態の児童生徒がいる中で一つの様式に記入することの難しさ、記入したことを意識しながら生活することの難しさ、面談の時間を設ける大変さなどがあり、活用していくことに課題が見られた。そこで、令和５年度は中学部で「未来へのスケッチ」の様式を変更し、月ごとに振り返りや目標を設定し、生徒が自分を振り返る時間を設けた。家庭にコメントを依頼し、振り返りを積み重ねることで、新たな目標を設定したり、そのために日々の授業や家庭で何を頑張るなど具体的に考えたりして、学校や家庭の生活を見直すきっかけとなった。小学部では、教師と決めたことを記入するだけでなく、イラストや絵を使って簡単に作成したい、高等部では現場実習や作業学習の目標などとリンクして作成できるようにしたいなど、児童生徒が活用しやすい様式のアイディアが出された。また、職員同士でも日常的な会話の中において「未来へのスケッチ」という言葉が聞かれるようになり、生徒も「未来へのスケッチ」に目標を記入したりすることが定着しつつあり、学校の教育活動や授業とつなぎ、どのように活用していくべきか考える段階になってきた。

（２）令和５年度の成果

令和５年度の成果や今後に向けては以下のとおりである。

＜令和５年度の成果と今後に向けて＞　○成果　→今後に向けて

児童生徒が学びをつなぐ授業づくりのポイント

○活動内容や学習展開の工夫をして興味・関心の幅を広げる
○校内人材を活用し、第三者からの評価で自信につなげる
○学んだ履歴を視覚的にまとめて掲示、振り返りの時間を確保する
○卒業後を見据え、地域資源を活用し、学校全体に学びをつなげる

児童生徒の学びをつないだ姿や変容

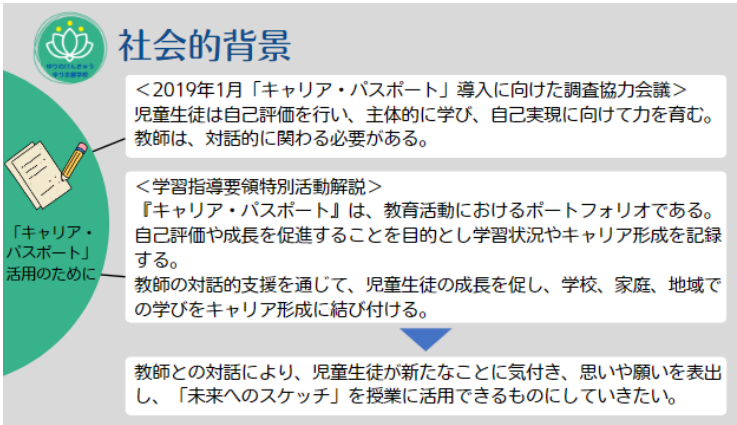
〇学級での所属意識が高まり、約束やルールを守ろうとするようになってきた。
〇教師が児童同士をつなぐ言葉掛けをしてきたことで、意見をまとめたり、友達の意見を聞いたりするようになってきた。
〇１か月ごとに目標設定と振り返りを積み重ねたことで、目標や夢について自分ごととして考えられるようになってきた。
〇夢や希望を叶えるために努力し、今の頑張りが卒業後につながることを実感できるようになった生徒が増えた。
〇生徒が自分の得意、不得意に気付き、前向きに取り組んだり、将来の進路について考えたりする機会が増え、自己理解につながったり、深めたりすることができるようになってきた。
→「未来へのスケッチ」を授業にもっと活用したい、保護者や寄宿舎と連携したい
→児童生徒の思いや願いを大切にしつつ、授業の中に取り入れ、児童生徒の学びをつなげたい

また、令和５年度の研究のまとめでは、児童生徒の学びをつなぐために三つの提言が挙げられた。

・児童生徒の思いや願いを反映される授業づくり
・児童生徒の実態に応じて「未来へのスケッチ」を活用し振り返りや自己評価、他者評価ができる仕組みづくり
・学部間の「学びの連続性」やキャリア教育の視点も考慮した教育課程の見直し

令和５年度の研究実践を通して、教師は「未来へのスケッチ」を日々の指導に生かしたり、児童生徒の目標や夢を達成するためのツールとして活用したりしながら少しずつ授業づくりにも取り入れることができた。「未来へのスケッチ」を作成するに当たって大切なことは、教師が児童生徒との日々の対話を通して目標や夢を聞き取り、共感的な姿勢で関わることである。また、そのやり取りの中で、児童生徒の「〇〇したい、〇〇をやってみたい」などの思いや願い、学びたい気持ちをくみ取りながら、授業に生かすことが教師の専門性として必要なことであると考える。本校の授業づくりを見たときに、教師主導で授業を進めてはないか、児童生徒が学びたい気持ちを高められるような単元設定になっているかなど、必ずしも児童生徒が夢中になって取り組む状況が設定されていないように思われる。児童生徒が学びたい気持ちが高まるように授業を工夫することで、主体的な学びにつながったり、もっと学びたいと夢中になって取り組んだり、児童生徒自身が学んだことや自分の成長をより実感したりするのではないかと考える。また、教師の授業に対する意識も、教えるのではなく子どもの視点にたって授業づくりをするようになると考えた。

（２）社会的背景



2019 年１月の「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議では、「小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的に関わることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの」とされている。また、学習指導要領特別活動解説からも「『キャリア・パスポート』とは、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、

自信の変容や成長を自己評価できるように工夫されたポートフォリオのことである。なお、その記述や自己評価の指導に当たっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばし指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うように努めなければならない。」とされている。

このように、学校においてキャリア・パスポートを作成し活用していくことが求められているが、特別支援学校では様々な実態の児童生徒がいる中でどのように学校生活や家庭生活、授業に生かしていくかが課題であると考える。

そこで、昨年度までの研究の取組や社会的背景を踏まえ、研究主題として「学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指す授業づくりーキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通してー」を設定した。

２　研究の目的

令和５年度までの研究で、児童生徒が学びをつなぐために必要な方策を考え、授業実践をしてきた。学びをつなぐためには第三者からの評価で自信につなげる、学んだ履歴を視覚的にまとめる、卒業後の生活を見据えて地域資源を活用するなど授業づくりのポイントを導き出すことができた。しかし、児童生徒自身の、「〇〇したい、〇〇を学びたい」という声に耳を傾け、生徒主体の学びを重視し、年間計画や学習の展開をしていたかを振り返ると、必ずしも児童生徒を第一に考えていたとは言えない部分もあったと考える。

このことから、児童生徒がどのようなことに興味・関心があるか教師が見取ったり、児童生徒の思いや願いを聞き取ったり、学びたい気持ちを高められるような授業実践をすることで、児童生徒主体の学びにつながり、様々なことに前向きに挑戦し、夢中になって取り組む姿につながるものと考える。また将来の生活を見据えると、学びの成果や成長を保護者に知ってもらい家庭と連携をして取り組むことが必要である。そうした取組の中で、児童生徒が主体的に学びに向かったり、新しく知識を得る楽しさを感じたり、興味・関心が広がったりなど、将来の豊かな生活につながると考える。児童生徒の学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指し、「未来へのスケッチ」を活用しながら授業づくりをしていきたいと考えた。

３　研究の内容と方法

上記の目的を達成するために、２年計画で以下の内容と方法を設定した。

（１）令和６年度

①児童生徒が学びたい気持ちが高まるような題材設定や単元の工夫

・児童生徒の（もっと〇〇をやりたい、〇〇がしたい、〇〇を調べたい、〇〇を知りたい、〇〇に行きたい）などの主体的に学びたい気持ちが高まるような題材設定や単元の工夫をし、夢中になって取り組む姿を目指した授業づくりをする。

・年３回（５月、８月、１月）の全校縦割り授業ミーティングを実施し、他学部の視点から意見をもらい、年間指導計画の検討、単元や題材検討、授業内容の検討、児童生徒の変容の共有などをする。

②「未来へのスケッチ」の活用と、児童生徒の学びたい気持ちを大切にした実践

・学部ごとに児童生徒の実態に応じた「未来へのスケッチ」の様式や活用方法を検討し、児童生徒の思いや願いを書き込んだり、自分の学びを蓄積し、振り返ったりできるようにする。

・児童生徒の思いや願いをくみ取り、主体的に学びたいと思えるような授業の工夫をし、事例対象児童生徒の変容を検証する。

③保護者と連携して取り組むための仕組みづくり

・「未来へのスケッチ」を何のために作成するか保護者に周知し、連携していくことをお願いする。

・保護者面談で活用し、保護者と共に「未来へのスケッチ」を作り上げていく。

・小学部、高等部は学期毎の年３回、中学部は１か月毎に「未来へのスケッチ」の保護者欄に記入してもらい学校と家庭の連携を図る。

④「未来へのスケッチ」作成から教育資料作成までのシステムの構築

・児童生徒との「未来へのスケッチ作成」の面談から思いや願いを聞き取り、年間指導計画、個別の指導計画、個別の教育支援計画作成、授業づくりまでのシステムを構築する。

（２）令和７年度

①学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指す授業実践

・年間指導計画や授業計画に児童生徒、教師、保護者の思い・願い（教育的ニーズ）を反映した授業づくりが機能しているか検証、改善する。

②「未来へのスケッチ」のさらなる活用

・児童生徒が学びを実感し、振り返ったり、目標を設定したりするものとなるように、様式や記入方法、掲示方法などを工夫し、授業づくりに生かす。

③児童生徒の変容の見取り

・エピソードから児童生徒が学校、家庭などでどのように変容したかを見取り、必要に応じて改善する。

④全校縦割りミーティングの実施

・年３回（５月、８月、１月）の全校縦割り授業デザインミーティングを実施し、他学部の視点から意見をもらい年間指導計画の検討、単元や題材検討、授業内容の検討、児童生徒の変容の共有などを通して、児童生徒の思いや願いに即した授業の展開を意識できるようにする。